クリスマス・ツリーものがたり

-地上の星 @ 同志社--

たま ひる (元大学神学部教授)

して西は彰栄館に面する一等地である。 新たに広場(サンクタス・コート)にな 2年末に取り壊した新彰栄館の周辺が、 が岩倉キャンパスに移転した後、201 換えられた。 同志社中学校(以下、同中) ツリー(2代目。 いまや京都の風物詩である。 その中心に立つヒマラヤ杉が

ライトアップ

訝そうに尋ねた市民がいた、とか。 2リスマス、始めはったんですか」と怪評判を呼んだ。その一方で、「同志社も 「京都一の高さを誇る華麗なツリー」と 初代から少し奥に入った 初代より長身)に切り 高さは20メートル 年である。 明白なのは、 を受けた記念として、後年、ここに植樹 教授としてのイメージが定着している。 ネッド記念図書館」の名称からも、学者 が、実は本職は宣教師(牧師)である。 した。キャンパスにある巨木で、来歴が 中にD・W・ラーネッドから同時に洗礼 ちなみに、ラーネッドは本学の「ラー 植えたのは、

ほかにはほとんどない。

4人は、同志社普通学校在学

久永機四郎

同志社教員の波多野培

植樹の時期

ープである。

樹したのは、自分が同志社普通学校を卒 親が同僚教師たちと共にヒマラヤ杉を植 ならば155年前のことである。 加藤延年の長男(延雄)によれば、

4人が拠金したとすれば、苗木は4本

4人の結束力

教会堂(木造)として新設された。

数年にして手狭になったので、キャ

で開かれていたが、

それ以前は、

礼拝も集会も新島の自宅

知事のキリスト教緩

和政策と、個人献金(J·M·シアーズ)

1881年に京都初の独立した

隣り(現在は日本キリスト教団洛陽教会)

の新島旧邸(寺町通り丸太町上ル)の南

彼らの受洗当時、

第二公会は、

に独立した会堂を構えていた。

に渡っていたため、

志社教会(日本キリスト教団)の前身で 新島が自宅に立ち上げた教会で、今の同

改称された。

つまり、

名も「同志社教会」と

わり)に移され、教会

第二公会である。同志社開校の翌年に、

4人が、揃って受洗した教会は、京都

日曜日だけ教会に早変

(平日は学校礼拝。 会場は学園チャ

なく新築された校舎(新彰栄館)のため

らは、

ったからか。翌週(6 会での最後の礼拝であ

切られてしまって今はない、

という。

志社の学生であったが、 4人が洗礼を受けた 受洗者は全部で15 ほとんどが同

良心館4Fから臨む二代目ツリー。奥の建物は図書館(2015年12月)

代ともども時に薩摩藩邸以来の古木と誤樹齢Ⅲ年を越す大木で、よく映える。初



謝の篤さは、半端では の親密さと恩師への感 ドに贈っている。 帰国していたラーネッ すでに同志社を引退し で記念写真を撮って、

同志

藤 (71歳)、 この時の年齢は、

波多野齢は、加

決心が、 半世紀を経てもなお永続してい 三輪など、16歳の時の 三輪 (66歳) である。 久永 (67歳)、

来月(11月)でちょうど70年となる。 4人中、 最後の三輪が亡くなってから

樹2本が伐採されるのを見ないで亡くな 次々と天に召された。彼らは全員、記念

植樹した人① 波多野培根

紹介する。 ツリーを植樹した4人の教員を個別に

祝う会を開いた。4人揃って、

半世紀に

8月20日、4人は新島会館で受洗50年を

それからさらに25年を経た1936年

わたって信仰を堅持したのは、見事であ

この日、

旧ラーネッド邸前

月20日)に植樹した、と明言する。

4人は受洗25周年記念日(1911年6

を訪ねて、感謝の気持ちを伝えている。 ネッド宅(現同志社女子大学キャンパス)

毎年6月 永続的である。

20日には揃って恩師のラ

同時期で、

1945年から翌年にかけて

4人の終焉は、ほぼ

る。奇しきことに、

それだけに、

その結束力は固

4

人は、

同志社在職

植樹はその一環である。

久永省一も、

波多野培根(1868年~ 9

月1日付)がある。

その内容は

句(ガラテヤ書6章7~9)に就て」と 社に学んでいた従兄の増野悦興の勧めで、45年)。島根県津和野の出身で、同志 礼はその翌年のことで、 1885年9月に同志社に入学した。洗 45年)。 「予の悔改入信の動機となれる聖 その日の日記に

76

通学校教頭の時であった。 892年、1904年~1918年)に 特に同志社は前後2回 育に従事した。そのうち、 志社を卒業してからは、各地で伝道と教新島の死の直後、1890年6月に同 わたる。ツリーの植樹は、彼が同志社普 な職場は同志社と西南学院(福岡市)で、 (1890年 もつとも重要

多野に新島が出した手紙(1888年11厚い信頼を寄せられていた。在学中の波 教(新島先師第30記念日)」を作詩した。波多野は若王子の新島の墓に詣で、「師 波多野は若王子の新島の墓に詣で、「師920年)、新島の命日(1月23日)に その中で「師教、 波多野は学生の頃から、 2度目に同志社を退職した2年後 當年を回顧し、涙瞼に満つ」と詠う。の中で「師教、懇篤にして猶、耳に存 新島校長から 耳に存

にだけでも会い、学校の将来のことを託 禁止されているが、せめては「僅僅ノ人」 学校からは「無残ニモ」学生との面談を 、他には柏木義円くらいである。当時の学生でこの種の手紙を貰ったの 学校と教会の前途につき、ぜひ相談し ので、 来宅は内密にお願いしたい、と わが家に来てもらえないか。

卒将来ハ、同志社ノ骨子ノートナリ、以関シテハ、兼テ談シ置タル通リナリ。何となって、東京談シのでは、「同志社ノ前途ニ多野に遺言状を残す。「同志社ノ前途ニ テ尽力セラレンコトヲ切望ス」 新島は大磯で永眠する前も、 学生の波 (傍点は

含めてわずか数名である。 個人的な遺書をもらった学生は、 彼を

こう追憶する。 波多野の教え子でもあった加藤延雄は

生のご自宅を訪ねて行った」。 新島先生に見込まれた人物だけあって、 ただ厳しい、 不思議に思えるくらい多くの学生が、 「波多野先生はこわい先生であったが 固いだけでなく、さすがに

波多野は、「新島先生の生涯の意義」 こう忠告する

> を継ぎ、其精神に従って正心誠意、学生の目的と精神とを善く理解して、其の志 を愛撫教化することである」(傍点は本 化することではない。先生の同志社建学 「新島先生を回顧するとは先生を偶像

を継ぐ』という書名で締めた。 ーズ(全44巻の講演集)の最終巻を『志 私もまた、拙著「新島襄を語る」シリ

植樹した人② 三輪源造

務めてから同志社に戻る。 6年)である。柏木義円と同じく、 校に進み、卒業後は松山や横浜で教員を 県与板の出身。 次に、三輪源造(1871年~ 同志社普通学校から神学 1 9 4 新潟

はり責任感の強さである。これこそ、 ちろん、「最偉大で最光輝」なのは、や 「寸毫だもこれを脱れむとしたまはざり る。同情(思いやり)、謙遜、熱心はも し一事」だと評価する。 三輪は新島の人格について、 こう述べ

づかぬ中に、 「往来で偶然行き合って、 新島の平等主義にも三輪は脱帽する。 先生の方から脱帽して挨拶 こちらが気

> 溢れたのであらう」。 として敬愛された先生の至情から自然に ういふ事は全く、 をなさるに恐縮した事も少なくない。 総べての人間を神の子

ど同様の慇懃な態度」をとったことに、 世をときめく高位高官に対するのと 三輪は驚嘆する。 新島が用務員(松本五平)に対しても 新島の平等主義に感銘



中央が初代、左が二代目ツリー。右は彰栄館(2016年7月25日)

特別寄稿■

る。 で、五平さんからである」と言ってのけで、五平さんからである」と言ってのける。 を受けた三輪は、「私が同志社在学中、

新島を畏敬してやまない三輪ではある。
さへある、極めて人間的な方であった」。
さへある、極めて人間的な方であった」。
さへある、極めて人間的な方であった」。

三輪は同志社で国語、日本文学を講じる傍ら、「花影」と号して詩作にも励んだ。る傍ら、「花影」と号しても著名で、旧『讃養歌』(1954年版)には3編(19番、美歌』(1954年版)が、現行の『讃美歌1』にも「羊はねむれり」(短番)が収録される。

今年の今出川のツリー点灯式(11月21年の今年の今出川のツリー点灯式(11月21年の前に、三輪の賛を毎年、披露しているように、三輪の賛を毎年、披露しているように、三輪の賛を毎年、披露しているように、三輪の賛とでは、11月21年の今出川のツリー点灯式(11月21年)

植樹した人③ 久永機四郎

3人目の久永機四郎(1870年~1346年)に移る。福岡県出身。同志社時であった。入学の翌年に受洗している。1893年に同志社神学校本科を出ると、各地で伝道や教育に従事する。19と、各地で伝道や教育に従事する。

教える傍ら、寄宿舎の舎監も務めた。 25年に同志社に復職し、英語や倫理を25年に同志社に復職し、英語や倫理を25年に同志社に戻ったものの、波多野の退職

息子の省一によると、「京都在住中は、終始、同志社教会の執事〔役員〕を務め、終始、同志社教会の執事〔役員〕を務め、

アメリカ習学寺弋り交達もあって、ないで講話をしたシーンである。は、来校した森有礼文部大臣が、チャペは、来校した森有礼文部大臣が、チャペルで講話をしたシーンである。

仕事を視察したかったに違いない。けれはわざわざ同志社に足を運んで、新島のアメリカ留学時代の交遊もあって、森

を生んだだけである。 と生んだだけである。

78

あり、覚悟であったやうだ」。 戦苦闘して進むのが、先生予ての選択で棘の路を切開いて、逆境不如意の間を悪棘の路を切開いて、ごうも指摘する。「却って荊

少年ながら鋭い指摘である。

植樹した人④ 加藤延年

最後は加藤延年(1866年~1945年)。福岡県柳川の出身で、海老名が5った。柳川中学校(伝習館)から久留米正の隣家で誕生した。両家は親戚でもあ正の隣家で誕生した。両家は親戚でもあ正の隣家で誕生した。両家は親戚でもあ正の隣家で誕生した。両家は親戚でもあれた。

99年に同志社に戻り、理化、地理、歴らは、九州各地で教鞭をとつた後、18の指導がものを言った。同志社を出てかの指導がものを言った。同志社を出てか

史などを教えた。

加藤は自身の卒業式(1889年6月) 加藤は自身の卒業式(1889年6月) で聞いた新島の式辞を感慨深く回顧する。新島が臨んだ最後の卒業式でもあった。新島が臨んだ最後の卒業式でもあった。

新島は、「苦き水を甘くせよ」との聖新島は、「苦き水を甘くせよ」との聖明用し、(おそらく涙ながらに)こう懇請した。諸君を送り込む現代社会は、「メラの水」のように苦さ(穢れ)で満ちているが、モーセが「一本の木」を投げ入れてそれを甘く(清く)したと旧約聖書(「出エジプト記」15章)にあるように、諸君もまた世を浄化する役割を果うに、諸君もまた世を浄化する役割を果していただきたい、と。

に思って居る」と自省した。 に思って居る」と自省した。 に思って居るが、此や励の如く、何等かになって居るが、此や励の如く、何等のがはないことを慙愧 はいいことを悪愧 はいいことを悪愧 はいって居る」と自省した。

これを耳にした教え子たちは、誰しも将あとには百の新島が出る」。加藤に限らず、島の言葉がある。「一の新島が死んでも、島の言葉がある。「一の新島が死んでも、

志を継ぐ人たち① 加藤延雄

以上の4人は、いずれも『日本キリス以上の4人は、いずれも『日本キリスの項は、それぞれ息子の省一と延雄が執の項は、それぞれ息子の省一と延雄が執の項は、それぞれ息子の省一と延雄が執いで、同志社の教員(校長)となっうな形で、同志社の教員(校長)となった点でも、共通する。

は、ライオン先生にある。

松が1955年に同中に入学した時、
を長は加藤延雄(あだ名はライオン。同
で書」の授業で、新島伝を1年間、習
で聖書」の授業で、新島伝を1年間、習
を長は加藤延雄(あだ名はライオン。同



加藤延雄 (『同志社中学校卒業アルバ ム』1958年 3 月)

こ。 さらに加藤は、校長退職後には、同志とらに加藤は、校長退職後には、同志を超て、研究会代表の椅子が私に廻っ年を経て、研究会の事務主幹として、森中章社新島研究会の事務主幹として、森中章社新島研究会の事務主幹として、森中章といった。

志を継ぐ人たち② 加藤美登里

私の分級担任がライオンの娘であった。社の分級担任がライオンの娘であった。責任(ジュニア・チャーチ)であった。責任に同志社教会日曜学校の中学生クラスに同志社教会日曜学校の中学生クラスに同志社教会日曜学校の中学生クラスに同志社教会日曜学校の中学生クラスに同志社教会の分級担任がライオンの次女(同志社なの分級担任がライオンの娘であった。

79

校で英語を習った。

加藤延雄に続いて、

える」(傍点は本井)。 樹の下を通る際に、

圧迫感は、

戦慄でもあったであろう。

9年に同中の校長にも就いた。

中学生相手の同志社教会ジュニ

久永省一先生も私の恩師で、同志社高

以来、

志を継ぐ人たち③

久永省一

茂みを見上げると、

明治の新島の弟子達

の執念のようなものが宿っているようで、

一種の圧迫感をおぼ

(加藤延雄『わたしと同志社』より)

文科卒)は、 多かった。 ア・チャーチで、

加藤にとって久永(大学は英

加藤と恊働することが

かつて同志社中学で西洋史

久永省一

(同志社社史資料センター

提供)

加藤家三代一左から長男・延雄、延年、孫・美登里、妻・かね

新島、波多野、加藤、久永の師弟ライン

恐れ多くも私は受け継いでいる。

久永は、

加藤延雄の遺品整理も手掛け

を授けた教え子でもあった。

つまりは、

役員会で美登里さんと 私は同志社教

した。 丈の短いズボンを無理にずらし恩師の古着を何着も貰い受けて、愛

「同志社ノ骨子」 となる

て歩き、 用した。

加藤美登里を唖然とさせた。

執筆・出版活動にも力を入れ、

父・

員を務める傍ら、

新島襄の生涯や同志社

して同志社中高の教員(校長)や教会役

加藤延雄、久永省一両氏とも、

(教会)の歴史を掘り起こすことにも力

を注いだ。

これも両氏の父親が、

「新島

同席するようになった。彼女は役員会で 会役員に選ばれ、 代にわたる見事な奉仕である。 も中核(会計)を占めていた。 それから40年ほどして、 加藤家3

> 社で話したこと書いたこと』、加藤延雄 久永機四郎の記」を執筆したり、 『同志

や『わたしと同志社』を出版した。 の遺稿を編集した『新島襄と同志社教会』

久永省一はツリー植樹の貴重な証言を

2本は「彰栄館の周りに亭ていとしてそ

目にも歴然と受け継がれている。 を継ごうとするDNAは、

他の2人のケースも同様である。

死後、「小新島」となって、創立者の「志」 の弟子達」であったからである。新島の

2代目、

3 代

びえ立っている」。「残る二本の鬱蒼たる

こう締めくくる。

切られずに生き残った

手をのばしていたと伝わる。 さらにギリシャ語やラテン語にも ツ語、フランス語をほぼマスタ

る。 心をいつまでも把え続けた 学園形成を成就しようとする生き方であ の新島の遺訓は、こうして教え子たちの 新島」となって、 これぞ、新島の志を継ぐ「同志」や「小 将来はぜひ「同志社ノ骨子」に、 創立者が夢見た理想の

在職中「同志社を日本一の学校にしなけ

新島から遺言を貰った波多野培根は、

ればならない」との決意から、

教員とし

て最大限の努力や準備をした。

たとえば、

語学を必死に勉強し

Ť,

婿であり、三輪輝夫 (元大学就職部長)

同志社教会役員)は波多野の娘

は三輪源造の3男であった。

社職員で言えば、波多野政雄(元神学部



ツリーを植樹した 4 人 1936年 8 月20日、受洗50周年記念に旧ラーネッド邸前で撮影。 左端が久永、右端が三輪、前列左が波多野、右が加藤 (同志社社史資料センター蔵の写真を一部加工)

地上の星

のように思えてならな さながら同志社における「♪地上の星

求めて空ばかり見上げ 輝いている。にもかかわらず、 は嘆き唄う。 ペガサスやヴ 実は草原や水底や崖の上で人知れず ナスを始め多くの星 る、 と中島みゆき 人は星を

とつば で輝いているのか、 行方を知っているに違いない。 高い空を飛ぶつばめなら、 めに哀願する。 ぜひ教えてほしい、

もなかろう。 同志社に限っては、 つ ばめに聞くまで

と思えるからである。 シーズンになるとツリ 地上の星のいくつか は、 ーの中で光り輝 ク リスマス

ある。 て放つロールモデルの「光輝」のようでれを植えた先人が、私たち後続者に向け キャンパスに煌くツリー の電飾は、こ

地上の星の いまどこ

81